

徳富蘇峰記念館

目録 (1)

絵画展(昭和55年7月10日)

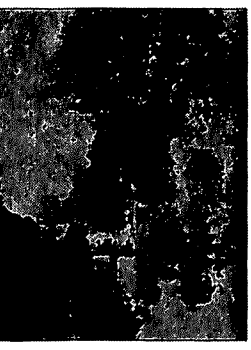
ケース番号21

川端龍子(明治十八年—昭和四十一年)作
蘇峰肖像画 117cm×175cm 昭和二十六年
蘇峰先生の米寿を祝して、門下有志の
者が先生に贈ったもの。昭和三十三年
蘇峰は次のような手簡をつけてこれを
塩崎彦市に贈った。

恭加新禧、去年ハ最近十年中老生ニ
取りテハ尤モ凶歳ニ候処、貴兄御調護ノ
効空シカラス無事迎新、感謝此事ニ候。
却説、御熟知ノ通り老生米寿祝賀ニサ
イシ、有志各位ノ發起ニテ肖像画御
贈與ノ件ハ、特ニ老生ノ意向打診ノ上、
川端龍子画伯ニ懇囑、画伯欣然快諾、
経営慘澹、独造ノ意匠、奇創ノ手筆、
其ノ我等ノ豫想ニ超越セル傑作タル
コトハ、当時東京及各地展覽「」具眼
者ヲシテ欽賞嘆美セシメタルヲ以テ之ヲ
知ルニ餘リアリト存候。然ルニ老生最早
百歳ニ手カ届クマテノ還齡ト相成、此ノ
國寶タルヘキ傑作ノ処置ニ付考慮ノ上、
貴蘇峰堂ニ寄進シ、一ハ以テ蘇峰堂鎮
守ノ護符トナシ、一ハ以テ蘇峰堂ニヨリ
テ永久ニ保存シ、且ツ社会風教ノ上ニモ
効果アラシメ度、御相談ニ及ヒ候処、
貴兄モ御承諾相成「リ」、イヨイヨ無滞
上記ノ通り相済候儀、老生ニ於テモ安
神此上ナク存候。就テハ、貴兄ハ勿論、

後ノ蘇峰堂ニ主タル御方ニモ、老生「」
所志徹底スル様、春秋ノ佳日ニハ展披
ノ上、同志雅会御催フシ、又機会アル
毎ニ此ノ國寶的傑作ノ存在ヲシテ意義
アラシムル様、御肝煎相願申上候。尚申
上度事モ候得共、万々紙外御洞察皮
「被」下度、先ハ新年御祝儀ヲ兼、艸々
頓首。昭和三十三年正月朔一。蘇叟九
十五。蘇峰堂主塩崎峰賢契 玉机下。
二階展示室中央に飾られた肖像画は、
臥龍梅の前に紫の袖なしをつけ、白髪
は肩にまでかかり、威風堂々仙人のよ
うな風格である。蘇峰を尊敬していた
龍子の剛健なる画風が、翁の精神まで
も生々と描きだしている。
蘇峰愛硯 22.5cm×15.2cm×5.3cm 瑞古硯。
堀河天皇の時代、今より八百五十年以
前のもの。
陶器焼付花器 44.5cm 梅花盡尺
ケース番号22
平福百穂(一八七七年—昭和八年)
白梅 155cm×47cm 墨画。
五松画 140cm×42cm 淡彩色画。賛、

狼藉たる松杉、摧けて関を作り、
劫餘の煉色、東山に満つ、
師恩未だ報いず、吾既に老いたり、
空しく遺墳に對して涕涙潸たり、
蘇史翁七十八



仰見英雄唱義跡、雙峯仍奮推屏顔、蘇
叟七十五。
一本松 150cm×28cm 墨画。賛、野翁
不啻興亡事、得々松陰馭馱來、大正丙
辰、蘇峰題。

牛 68cm×117cm 墨画 明治孟春青龍
山に於て百穂寫。進歩難し兮、進歩遅
し、遂に退かず、遂に息まず、千里を
問はず更に萬里、能く極南より極北に
達す。蘇叟題。

欽仰帖 33cm×24cm 明治三十三年、
新島先生墓前、高野山奥の院等を訪ね
た時の、百穂画冊に蘇峰が文章を書い
ている。十景。蘇峰七十七歳の時、「高
風を欽仰す」の題字あり。

平福百穂風景帖 26cm×23cm 淡彩色画。
百穂の画のそれぞれに蘇峰が一詩を題
している。日光の不動、野山雨情、女
人堂、極楽橋等十景。百穂大正八年八
月作。昭和十五年蘇峰七十八の時、護
法靈場の題詩。

百穂風景帖 20cm×28cm 淡彩色画。
桶狭間、琵琶湖、京都等十景。一幀に
一詩を題す。
ケース番号26
百穂帖小品 12.5cm×9cm 淡彩色画。
奈良・法隆寺・嵐山等十景。
百穂絵付湯のみ 6cm×7cm 3個。
ささ、竹の子、ききょう。

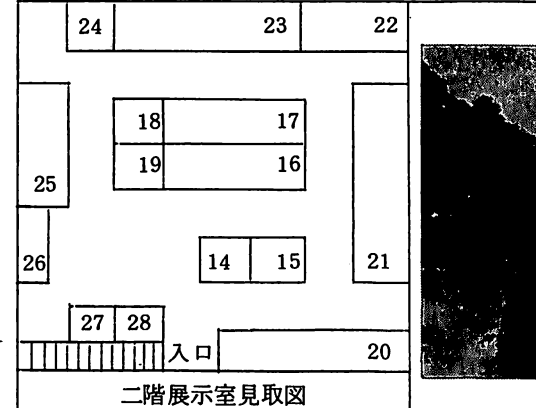
平福百穂は、秋田の画家穂庵の子と
して生れ、東京美術学校を卒業後、文
展・帝展にも参加し、古典的傾向に走
りつつあった当時の日本画に、新生面を
開拓した第一人者と言われる。晩年は
南宗画ふうの淡彩色を描いたほか、ア
ラギ派の歌人でもあった。蘇峰も佐

々木信綱の弟子として歌人であり、百
穂との親交の深さは、次に掲げる五冊
の本からも窺われるであろう。
山水随縁記 蘇峰字人著、平福百穂画
大正三年民友社刊。和綴 22cm×15cm
250頁。大正二年六月二十九日から八月三
十日迄、耶馬溪及瀬戸内海。別府・青
龍寺・岳麓附近を漫遊しての記録。政
党遊説でもなく、民情視察でもなく、
休養期をもつて百穂伯と相拉「携」へて
西下すと記している。百穂の版画・墨
絵・淡彩画・エンピツ画等各種の絵が
収められ、美しい旅行記。
蘇峰文選 草野茂松・並木仙太郎編。
大正四年十二月民友社刊。22cm×15cm
143頁。国民新聞創刊25年記念に出版さ
れたもの。明治十九年18歳の時の「將
来の日本」から、大正四年までの文章、
「文学者の新題目」「トルストイ翁を
訪ふ」「ホスピタリチー」「遠慮論」「精
神的解脱」「人酔の説」等310篇が収め
られ、国民新聞社編輯局における蘇峰
執筆姿が、百穂によって描かれている。
支那漫遊記 大正七年六月民友社刊。
22.5cm×15cm 556頁。茫洋とした支那大
陸の中に浮びあがった、白馬に乗った
赤衣の貴人、と題したくなるような百
穂の表釘。大正六年九月から同十二月ま
で支那を漫遊し、各地の訪問記を138篇
にまとめたもの。明治三十九年五月
八月の遊支偶録89篇を併せ収める。
頼山陽 大正十五年十一月民友社刊。
22cm×15cm 534頁。木崎愛吉編による山
陽日譜134頁も併せ収められている。表裏
両扉にかけて、百穂はかも川と京都の山
々・寺・おはらめ・竹やぶ等を淡彩で描
いている。蘇峰は明治天皇の偉業を書

くために「近世日本国民史」の筆を起し、歴史の真髓は頼山陽に学び、その形式は中国の史記に学んだと言われる。蘇峰先生知友新稿 矢野国太郎編。昭和六年十一月民友社刊。22 cm × 16 cm 116頁。昭和七年の蘇峰の古稀を祝し、各方面の知友一三六人の文章・絵画・詩歌等を集めて編纂された。当時の蘇峰の交遊の広さを示すものとして、興味深い。沢沢米一の題辭にはじまり、東郷平八郎・西園寺公望・清浦奎吾・横山大観・川合玉堂・平福百穂・大谷光瑞・黒板勝美・内藤虎次郎・与謝野寛・晶子・高浜虚子・木下杢太郎・吉屋信子等が寄稿している。装釘は百穂によって表裏両扉にかけて、筆を持った鬼が波の上を走って行く図が描かれている。蘇峰が文章活動をしている精神の勢いが、美しく力強い墨線となり、風神とでも題したいような画。百穂は昭和八年56歳で没しているのので、晩年の作といえる。

ケース番号 23
橋本雅邦 (文政六年―明治四十一年) 扇面風景画 44 cm × 56 cm 墨画。
四季山水画 31.5 cm × 50 cm 墨画。
四季山水画 32 cm × 84 cm 墨画。

四季山水は昭和十八年蘇峰の手簡、秀邦の添状と共に塩崎彦市に贈呈された。添状。秀邦、先考雅邦翁筆、紙本墨画四季山水四幅対、正三拜見仕候。先考の作品に対して賛辭を呈するは如何と存候得共、瀟洒清爽の氣に満ち、何となく先考の温容に接するの感有之候。何卒永く御愛蔵成下度希望乃至に堪へす候。大正十二年七月、橋本秀邦。神韻纏渺、昭和龍飛、癸未秋、蘇峰八十一



橋本翁雅邦ハ明治ノ巨匠ニシテ皇國近世畫家ノ泰斗也。其畫古今東西ノ神髓ヲ折衷シテ自家一家ヲ作ス。予往年東台繪畫展覽會ニ赴ケリ、偶々親友川上參謀總長在焉、乃チ相與橋本雅邦岡倉天心諸君ト總長ニ誘ハレテ午餐餐ヲ偕ニス。興趣如湧、總長從容予ニ誇テ曰ク、此ニ北京矢野公使ヨリ乾隆佳帑〔紙ヲ獲タリ、希クハ橋本翁ノ揮洒ヲ乞フテ、之ヲ君ニ呈セント、翁首肯ス。幾モナク總長婦幽、事遂ニ熄ム、予乃翁ヲ訪フテ曰ク、總長〔言、耳尚熟ス、敢テ翁ヲ煩ストコロアラシ、但シ佳紙ナキヲ憾ムル耳ト、翁欣然トシテ曰ク、吾ニ越前新製ノ雅邦紙アリ、之ヲ以テ君ノ望ニ應セント、此ニ於テ予曰ク、畫題ハ四季山水、而シテ惜墨如黃金、愛筆如白金ヲ是望ムト、翁復欣然快諾ス。予翁ノ作ヲ得ルヤ珍〔珍〕重惜カス、日夕青山艸堂ノ楼上ニ遍〔遍〕額トシテ相欣賞ス、偶々児万熊曰ク、遍〔遍〕額ハ名

畫ヲ永久ニ護持スル所以ニアラズ、請フ之ヲ條幅トセント、仍リテ其ノ言ノ如ク改装シ、之ヲ成實堂ニ藏スル有年於茲、去年春夏ノ交、予罹疾、荏冉〔再〕不癒、塩崎君彦市勞ヲ忘レ、苦ヲ忘レ、費ヲ忘レ、遂ニ吾ヲ忘レ、周旋奔走、漸ク小康ヲ得ルニ至レリ、予一物ノ以テ君ニ報ユルナシ、是ヲ以テ家妻ト胥議シ、不腆ノ什ヲ挙ケテ之ヲ贈ル、餘情紙外ニ在リ、君看取セヨト云爾。昭和癸未九月吉、老蘇八十一ケース番号 20

棟方志功 (明治三十六年―昭和五十年) 御龍圖 襖四枚
志功の襖絵の中でも龍は稀な題材。志功は蘇峰堂の牡丹・梅花・四季折々を愛し、しばしば来遊した。塩崎彦市の蘇峰に対する姿を通して蘇峰を尊敬し、蘇峰の揮毫した四枚襖の裏側に己も龍を描き、永く蘇峰堂に残してほしいと自から筆をとり、一日で描きあげた。天に昇る龍を墨で描き、銀ばくと淡い朱をほどこした画面は、品格の高い雄大なもの。永眠する一年前、最晩年の作。

達磨図 35 cm × 23 cm
志功はかねてより達磨は難しいと言っていた。蘇峰の達磨を大変気に入っていたので、塩崎彦市が一枚贈呈すると、大喜びであった。はからずもダルマが志功の病床での最後の題材となった。蘇峰も敗戦後百二十枚の達磨を書いている。志功の親友草野心平は次のように語っている。「この達磨自体が志功そのもので、言はば象徴的自画像と言ってもいい。この達磨を見ていると、私はむしろ悲しくなる。(略)。彼

は病院生活中に達磨を百点描くと言ったそうである。結果はどうだったろうか。棟方川達磨、いかにも象徴的である。火達磨が駆け回っているうちに燃えつきた、そのように凄烈な彼の生涯だった。」
達磨 蘇峰 28 cm × 15 cm
自画自賛。当座遺線諸公ニ任ス、私シハ仮睡ノ五百年。頑蘇八十七。左を向いた達磨は少ない。

あとがき

展示換の度に展示品の目録を作ることによって、記念館の収蔵品が少しずつ整理されて行くことと思います。今回の絵画展の目録は、外観をお伝えするだけの不十分なのですが、皆様の目でご覧になり、感じ取っていただきたいと思えます。二階のケース 24・25・27・28には、常設展示として浜田庄司の塔形骨つば、奈良の板戸、中村吾堂の胸像、古印・筆等が展示されていますが、次回よりケースにつ紹介していきますと思えます。ケース 14・15・16・18・19には有名人の書簡、桂太郎・九条武子・斎藤茂吉・東条英機・徳富蘆花・松方正義・新島襄・山県有朋・与謝野寛・頼山陽等が展示されています。書簡展の時に詳しく解説を試みることにします。

今回は遺墨展ですが、蘇峰翁を中心に明治・大正・昭和の名士及び白隠禪師、貝原益軒、本居宣長等歴史上の人物の遺墨も展示し、遺墨五十人展を計画しています。

昭和五十五年七月、徳富蘇峰記念館。